

- ・責任の外部転嫁

この性向を持つ生徒は自分の行為に責任をとることを常に拒否し、失敗や欠点について他人や出来事、あるいは環境を非難する。非難する場合、その生徒は合理的な討論や常識を受け付けられないように見受けられる。

- ・低い自尊心を隠す

この性向を持つ生徒は尊大で自己を飾る態度を演ずることがあるが、よく見るとその生徒の行為は内在する低い自尊心を隠すためと思われる。彼は学校で目立ったり学校活動に参画することを避け、他の生徒は彼をつまらない奴と見ることがある。

- ・怒りを制御できない。

適当な方法と適切な時期に怒りを表すのではなく、この性向を持つ生徒は常に気分的にかんしゃくを爆発させたりメロドラマ風に怒ってみたり、あるいはそれとは逆に、拗ねてぶつぶついいながら黙りこんでしまうこともある。その怒り方は原因に比べると異常な激しさであり、あるいはもとの原因と関係のない人に怒りが振り向けられることもある。

この性向を持つ生徒の怒りは予測も抑制もできない爆発となり、他人や他のグループへの根拠のない偏見、悪意や憎悪を伴うことすらある。

- ・偏狭性

この性向を持つ生徒は民族的や宗教的偏見、あるいは少数民族に対して偏狭な態度を表明し、入れ墨、装飾品、着衣、バンパーステッカー、あるいはブックカバーなどに偏狭なスローガンやシンボルを付けることがある。

- ・不適切なユーモア

この性向を持つ生徒のユーモアは常に不適切である。ジョークもユーモアも気味が悪く、侮辱的で相手をけなし、汚らしい。

- ・他人を誤魔化そうとする

この性向を持つ生徒は、他人を騙し誤魔化して信用を得ようとする。それは自分のよこしまなあるいは脅威的行動の兆候を正当化するためだ。

- ・他人を信用しない

この性向を持つ生徒は他人を信用せず、慢性的に他人の動機や意図を疑う。この信用できない状態は生徒が病的な偏執狂状態に近づいているのかもしれない。この生徒にとって、社会とは正義を実行し衝突を解決するには不適當な機構又はメカニズムであり、もし何か迷惑なことが起こったら自分のやり方で片を付けるという考えを表明

するかもしれない。

- ・閉鎖的な仲間

この性向を持つ生徒は内向的で、友人というよりは仲間としかつきあわず、知らない人を排除する小さなグループとしか交際しない。脅威したり脅威を実行する生徒は必ずしも文字通りの一匹狼ではない。彼のつきあう仲間グループの構成や質が、彼の脅威が実行されるかどうかの危険性を評価する上で、重要な情報の一つとなることがある。

- ・行為の変化。

この性向を持つ生徒の行為は劇的に変化する。生徒の学業は低下するだろうし、学校の規則、スケジュール、服装規定、その他の規制を無視して意に介しない。

- ・頑固で独断的

この性向を持つ生徒は頑固で冷笑的、自分の知らないことについても声高に意見を述べる。生徒は事実、論理、あるいは自分の意見に反する推論を無視する。

- ・劇的な暴力に異常な関心を示す。

この性向を持つ生徒は校内発砲事件その他の報道された暴力行為に異常な関心を示す。その行為を行った者を賞賛したり、殺した人数が少ないと犯人の”無能力”を批判したりすることがある。生徒は”正義”の行為として、自分の校内で類似の暴力行為を実行したいと明白に表明するかもしれない。

- ・暴力が充満した娯楽に魅惑される

この性向を持つ生徒は暴力、憎悪、支配、権力、死、及び破壊を主題とする映画、テレビ、コンピューターゲーム、あるいは印刷物に異常な魅惑を感じることがある。生徒は、暴力的内容、それも学校暴力の内容をもつ一本の映画あるいは一冊の本を、絶え間なく何度も何度も見たり読んだりする。憎悪、暴力、武器、大量破壊の主題は文字通り彼の行動、趣味、娯楽の全てに繰り返して現れる。

その生徒は暴力的テーマのビデオゲームで異常なほど長時間遊ぶ。そしてゲームそのものよりも暴力的画像により興味を惹かれているように見受けられる。

インターネット上では、生徒は暴力、武器、その他騒乱的なテーマに関するウェブサイトを常に検索する。その生徒はそのようなサイトから騒乱的なコンテンツをダウンロードすることもしばしばある。

- ・マイナスの人物像

この性向を持つ生徒は、ヒットラー、悪魔、その他暴力や破壊に関連する反正義で不適切なマイナスの人物像に引き込まれることがある。

- ・脅威実行に関連する行為

生徒は次第に脅威実行に繋がる行為にとらわれていく事がある。例えば、火器の練習や暴力関連のウェブサイトに変なほど時間を振り向ける。これらの行為に時間が振り向けられる結果、宿題、学校への出席、友人と遊ぶなどの日々の正常な活動の時間が著しく減少することがある。

第2側面：家庭の力学

- ・荒々しい親子関係

生徒と親子の関係が特に難しく荒々しくなる。この親子関係の悪化は、家庭内の色々な動き、特に両親の離別や義父・義母の出現によって顕著となる。生徒は両親を軽蔑するようになり、家庭における両親の役割を無視するか拒否する。時には生徒の家庭内で暴力が発生することもある。

- ・病的行為の容認

普通の両親であれば非常に騒々しく異常と思うような子供の行為に対して、この家庭の両親は反応しない。この両親は子供の問題を認めず受け止めようとしめない。子供の如何なる批判に対しても全く防衛的に対応するだけである。学校職員から子供の問題行動について訪問を受けても、この両親は無関心か、問題を矮小化するか、あるいは子供の不品行が明らかで著しい場合でもその連絡を全く受け付けられないこともある。

- ・手近な武器

この家庭では銃器その他の武器又は爆発物質を家庭内に保管し、子供が容易に近づける。更に重要なことは、武器を不注意に取扱い、安全に対する当然の注意も払われていない。例えば、銃器は鍵のかかる場所に保管されておらず弾薬を装填したままである。両親や模範となるべき人物が銃器を何気なくあるいは無造作に扱うことが、子供には武器は他人を威し問題を解決するのに便利で当たり前の手段だと感じさせることになるのかもしれない。

- ・親密さの欠如

この家庭には親密さや親近感が欠如しているように見受けられる。この家庭は最近に引っ越しをした。

- ・生徒が家庭を支配している

両親は子供の行為に何ら制限を設けておらず、しばしば子供の要求に負けてしまう。子供は異常なまでにプライバシーを主張し、両親は子供の行動、学校での生活、友人その他の関係についてほとんど何の情報も知らない。

両親は子供に怯えているようである。両親は子供に対抗したりいらいらさせると肉体的に攻撃されると心配していることもある。両親は子供の感情の爆発に直面したくな

いかかもしれない。あるいは子供を動転させると感情的な危機が起こらないかと心配しているのかもしれない。伝統的な家庭関係は逆転して、子供が権威像であるかのように、両親が子供であるかのようにになっている。

- ・無制限なテレビ、インターネット

両親は子供がテレビを見たりインターネットを使うことに何の監督、制限あるいは監視も行っていない。子供は自分の部屋にテレビを置いているかすきなようにテレビを見ることができ、暴力的な画面その他不適当な画面でも気の向くままに見ることができる。子供は家族や友人との行動よりも、テレビを見ることにより多くの時間を割いている。

両親は子供のコンピュータの使用あるいはインターネット利用を監視していない。子供は両親以上にコンピュータの使用方法を知っており、コンピュータは親にとって立ち入り禁止と見なされている。子供のコンピュータ利用方法は親に秘密で、内実は暴力的ゲームや暴力、武器、その他危険な内容に関連するものかもしれない。

第3側面：学校の力学

暴力行為が学校で発生した場合、学校は犯罪現場となる。どの暴力犯罪の場合と同様に、生徒が他の場所でなく何故学校で犯行を起こすに到ったのか、その決心に影響を与えた原因は学校のどこにあったのかを理解することが必要である。教育者又は評価者にとって自分の学校を”批評”又は評価することは困難であるかもしれないが、学校文化の中における生徒の役割と、生徒が自分の学校を脅威の目標にしようとする理由を―生徒の視点から―よく理解するために、学校の持つ特異な力学を―脅威の発生する前に―多少とも理解しておくことが必要である。

- ・生徒の学校に対する愛着の欠如

問題の生徒は学校、他の生徒、教師、及び学校の諸活動に対して愛着を持っていない。

- ・不作法な行為に寛容

学校は個々の生徒同士間、又はグループ間での不作法な行為を予防又は処罰しようとしなない。いじめは学校文化の一部であり、学校当局はいじめ行為を忘れやすく、一度もそれを防止しようとしなかったか又は滅多に防止しようとしなかった。生徒たちはしばしばいじめる側、いじめられる側、そして傍観者になる。(時には違う環境の中で同じ生徒が違う立場に立つこともある。)学校の環境が種族差別や階級差別を促すことがあり、その状況を変えようとせずに残っている場合もある。

- ・不公平な罰則

制裁行為が不公平に適用される。あるいは不公平に適用されていると生徒又は学校職員も感じている。

- ・硬直した学校文化

学校文化、それは公式又は非公式の行動のパターン、価値観、生徒間、教師間、学校管理者間の関係などであるが、これらが静止的で変わらず、社会の変化や新入生徒・職員のニーズに対して無感覚である。

- ・生徒間の序列 (Pecking Order)

生徒のあるグループは公式・非公式に他の生徒より権威と尊敬が与えられる。学校も生徒たちもこれら権威のある生徒グループを、他の生徒よりも学校にとって重要且つ価値があるように取り扱っている。

- ・無言律

生徒間で”無言律 (Code of Silence)”が行き渡っている。他生徒の行為や態度に問題があっても、そのことを安心して先生や学校管理者に話ができると感じている生徒はほとんどいない。生徒と教職員の間に信頼がほとんど存在していない。

- ・コンピュータの利用が管理されていない。

コンピュータとインターネットの利用は管理されておらず監視されていない。生徒は学校のコンピュータで暴力ゲームを遊んだり、暴力グループを推進したり爆弾製造技術を教えたりするウェブサイトの検索に使ったりしている。

学校は以前に生徒が関係した事件や問題を全て文書化し、今後の脅威評価を行う際に利用できるように整備することが必要である。

第4側面：社会の力学

- ・メディア、娯楽、技術

生徒は簡単に、誰にも監視されずに極端な暴力をテーマとする映画、テレビ、コンピュータゲームやウェブサイトを見ることができる。

- ・仲間グループ

問題のある生徒は、暴力や極端な信条を空想しているグループと強く排他的に関係している。このグループはグループの持つ興味や関心と考えを異にする連中を排除する。その結果、この生徒は考えを異にする他人とはほとんどかあるいは全くつきあわず、他人の視点や感じを聞いたりする”現実照合”から遮蔽される。

- ・薬物とアルコール

生徒の薬物やアルコールに関する知識や生徒のこれら物質に対する態度は重要である。これら物質に関わる彼の行動の些細な変化も重要な場合がある。

- ・外部への関心

生徒の学校外部への関心は注目しておくことが重要である。生徒からの脅威を評価する際に、これらの情報が学校の不安を軽減することになるかもしれない。

- ・物まね効果 (Copycat Effect)

メディアが繰り返し報道する校内発砲事件やその他の暴力事件により、各所でものまね的脅威や物まね的暴力を発生することがある。事実、物まね行動はごく普通のことである。文書記録によると、発砲事件が米国のどこかで発生した後は、全米的に学校脅威事件が増加することが強く示唆されている。米国のどこかで大きく報道された事件が発生した後は、生徒、教師、学校管理者、並びに法執行部門は、何日も、何週も、場合によっては何ヶ月も、騒々しい生徒の行動を注意して監視する必要がある。